

独立行政法人の抜本的見直しについて

- 現在、優先度が高い独法についても事業仕分けを実施
- この成果を踏まえつつ、年明け以降、独法の抜本的な見直しを実施

- 見直しの視点のポイント

1. 基本的姿勢

- ◎ 全独法の全事務・事業について、国民的視点で、実態を十分把握し、聖域無く厳格な見直し
- ◎ 独法制度自体の根本的見直しも含め、制度の在り方を刷新
- ◎ 事業仕分けを通じて明らかになった組織、制度などの課題に取り組み、結論を得たものから順次速やかに実行

2. 見直しの視点

- ◎ 事務・事業の抜本的見直し
 - ◆ 必要性、効率性及び有効性の観点から見直し
 - ◆ 国民にとって真に不可欠か、民間や地方で実施できないか等
- ◎ 独立行政法人の廃止・民営化等
- ◎ 組織体制及び運営の効率化の検証
 - ◆ ガバナンス強化、厳格なコンプライアンスの確立、効率的・効果的な事業実施、透明性の確保
 - ◆ 社会経済情勢の変化に即応したバランスシート・キャッシュフローの最適なマネジメント

- 内部ガバナンスについて法整備を行う

関連事項

- 独立行政法人整理合理化計画（19年12月24日 閣議決定）の扱い
： 当面凍結し、抜本的な見直しの一環として再検討。ただし、随意契約及び保有資産に係る事項については見直しを継続。
- 国の行政機関の定員の純減計画（18年6月30日 閣議決定）の扱い
： 計画上予定されていた新たな独法化案件（気象研究所、国有林野事業）による純減を除き継続。
- 不要資産の国庫返納
： 来年度予算での対応ができるよう法令上の措置を速やかに行う。

独立行政法人の抜本的な見直しに当たっての視点（案）

基本的姿勢

1. 従来の独立行政法人の見直しは抜本的な改革として徹底されたものとは言い難く、国民の不信感は払拭されていない。
2. このため、全ての独立行政法人の全ての事務・事業について、国民的視点で、実態を十分に把握しつつ、聖域無く厳格な見直しを行う。
3. 見直しの結果、独立行政法人の廃止、民営化、移管等を行うべきものについては、必要な措置を講じる。見直しの過程において、主務大臣が説明責任を果たすとともに、事務・事業の廃止等によってどのような問題が生じるかを具体的かつ明確に説明できない場合には、当該事務・事業の廃止等の措置を講じる。
また、独立行政法人制度自体を根本的に見直すことを含め、制度の在り方を刷新する。
4. 今後、以下の視点により、各独立行政法人について、今回の「事業仕分け」を通じて明らかになった組織、制度などの課題に取り組み、結論を得たものから順次速やかに実行する。その際、国の財政支出の見直し等を徹底する。

見直しの視点の考え方

全ての独立行政法人について、以下の視点で抜本的な見直しを行う。

なお、独立行政法人は、公共的見地から確実に行う必要がある事務・事業を担うものであるため、国の事業に対して行われる「事業仕分け」の結果、廃止、民営化等とされる政策に基づく事務・事業については、原則、国と同様に廃止・民営化等の措置を講じることは当然である。

1. 事務・事業の抜本の見直し

今回の「事業仕分け」の成果を踏まえつつ、全ての独立行政法人の全ての事務・事業について、必要性、有効性及び効率性の観点から、次の視点に立って抜本的に見直しを行う。

- ① 国民生活にとって真に不可欠なものであるか。
- ② 事業性を有するもの、民間の参入を阻害しているもの、国が一定の関与を行うことで民間が実施可能なものは民間において実施できないか。
- ③ 公的主体が行うべきものであっても、事務・事業の効果が一部の地域にとどまるもの、地域に分散させることが可能なもの又は地方で類似の事務・事業を行っているものなどについては、地方公共団体で実施できない

か。

- ④ 一の主体により一体的に実施すること、類似の事務・事業を行っている他の主体により実施することにより効率的・効果的に国民へのサービスが提供できるものについては、他の主体で実施できないか。
- ⑤ 国自らが直接行うことが真に必要なものについては、徹底した効率化を図った上で、国の行政機関に事務・事業を移管できないか。

2. 独立行政法人の廃止・民営化等

事務・事業の徹底した見直しの結果を踏まえ、独立行政法人の在り方を検討し、廃止、民営化及び移管等を行うべきものについては、必要な措置を講じる。

3. 組織体制及び運営の効率化の検証

上記の見直しと併行して、事務・事業を実施するにふさわしい組織体制及び効率的な運営について、ガバナンスの強化、効率的・効果的な事業実施の実現及び透明性の確保の視点から検証し、必要な措置を講じる。

- ① 独立行政法人制度の基本理念と国の関与の実態を踏まえ、内部ガバナンス、国の関与の在り方をどう構築すべきか。また、厳格なコンプライアンスをどう確立すべきか。
- ② 主体的・効率的な運営、国民へのサービス向上を図るための体制の在り方は適切か。
- ③ 市場動向を含む社会経済情勢の変化に即応し、業務運営の変革やバランスシート及びキャッシュフローの最適なマネジメントを進めるなど、機動的・効率的なマネジメントが確立されているか。
- ④ 役員の任命、法人の長の意思決定は適切に行われているか。
- ⑤ 主体的・効率的な運営のための目標・計画の設定、業務の実施、第三者による事後の評価、評価を踏まえた見直しというサイクルは有効に機能しているか。
- ⑥ 事務・事業の実施方法、規模等は適切か。
- ⑦ 関連法人等との資金や人の流れの透明性は確保されているか。
- ⑧ 随意契約は、真に合理的な理由があるものに限定されているか。また、競争入札についても、実質的な競争が確保されているか。
- ⑨ 保有資産（実物資産、金融資産）等の経営資源が事務・事業の目的・内容に照らして過大なものとはなっていないか。徹底的に縮減し、国庫返納等を行うべきではないか。
- ⑩ 自己収入の確保、既存財源の活用、民間の適正な負担の在り方の見直しなどを行い、国の財政支出の見直しが徹底されているか。
- ⑪ 独立行政法人の業務運営全般について情報公開が徹底されているか。また国民の理解を深めるための情報提供が徹底されているか。

独立行政法人の抜本的な見直しについて

平成 21 年 12 月 25 日
閣 議 決 定

すべての独立行政法人について、以下の基本的姿勢及び見直しの視点により、抜本的な見直しを行う。

1. 基本的姿勢

- (1) 従来の独立行政法人の改革は抜本的な見直しとして徹底されたものとは言い難く、国民の不信感は払拭されていない。
- (2) このため、すべての独立行政法人のすべての事務・事業について、国民的視点で、実態を十分に把握しつつ、聖域なく厳格な見直しを行う。
- (3) 見直しの結果、独立行政法人の廃止、民営化、移管等を行うべきものについては、必要な措置を講じる。見直しの過程において、主務大臣が説明責任を果たすとともに、事務・事業の廃止等によってどのような問題が生じるかを具体的かつ明確に説明できない場合には、当該事務・事業の廃止等の措置を講じる。
また、独立行政法人制度自体を根本的に見直すことを含め、制度の在り方を刷新する。
なお、独立行政法人の抜本的な見直しに当たって、独立行政法人の雇用問題に配慮する。
- (4) 今後、下記 2. に掲げる視点により、独立行政法人について、平成 21 年 11 月に行政刷新会議が実施した事業仕分け（以下「事業仕分け」という。）を通じて明らかになった組織、制度等に係る課題を踏まえつつ、結論を得たものから順次速やかに必要な措置を講ずる。その際、国の財政支出の見直し等を徹底する。

2. 見直しの視点

すべての独立行政法人について、以下の視点で抜本的な見直しを行う。
なお、独立行政法人は、公共的見地から確実に実施する必要がある事務・事業を担うものであるため、国の事業に対して実施した事業仕分けの結果、廃止、民営化等とされる政策に基づく事務・事業については、原則として、国と同様に廃止、民営化等の措置を講じる。

(1) 事務・事業の抜本的な見直し

事業仕分けの成果を踏まえつつ、すべての独立行政法人のすべての事